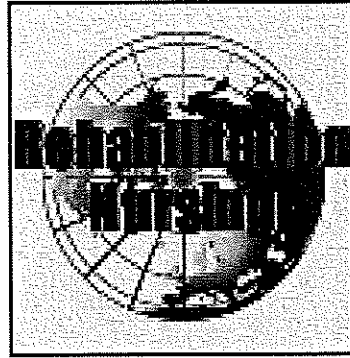


# 国際リハビリテーション看護研究会誌

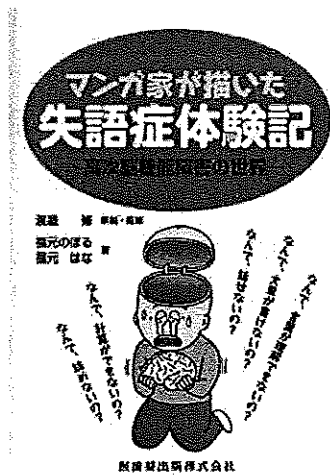


国際リハビリテーション看護研究会  
2011年3月15日 第10巻1号

1. 日々コウジ中—高次脳機能障害の夫と暮らす日常コミック 柴本礼著 主婦の友社  
2010 1100円+α



2. マンガ家が描いた失語症体験記—高次脳機能障害の世界— 福元のぼる、福元はな著 渡邊修監修 医歯薬出版 2010  
2000円+α



高次脳機能障害はリハビリテーション関係者でも、なかなかその全貌は捉えにくく、まして一般人に理解してもらうのは難しい。しかし、脳卒中や交通事故などで高次脳機能障害は増加している。昨年、相次いで当事者や家族による高次脳機能障害の本が出版された。今回、紹介する二冊は医療関係者による専門家向けのものではなく、当事者や家族が自分たちの体験と

本音を赤裸々に描いたマンガである。

「日々コウジ中」は2004年にくも膜下出血で倒れ、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、判断力の低下、感情失禁、易疲労性、病識欠如、金銭管理が出来ないという様々な症状を抱えたコウジさんが、家族の献身的な支えによって社会復帰を果たしていく姿を、イラストレーターである妻の目から、入院から6年間にわたり描いたものである。高次脳機能障害という言葉さえ知らなかった妻が、夫の様々な症状に驚き、あきれながらも、周囲の人の協力や理解を得て、家族会や社会資源を活用し、就労までにこぎつけて行く過程をユーモラスに描いている。保険や障害年金、厚生年金などの手続きの複雑さと申請に必要な書類の多さや、情報がない中で戸惑う姿など大変だったことがわかる。さらに高次脳機能障害者のための職業訓練センターやジョブコーチなど医療から離れてからの彼らを取り巻くシステムなどわかりやすく丁寧に書かれている。

「失語症体験記」はフリーのイラストレーターが2001年に脳梗塞により失語症を患い、その後に見れた様々な症状とリハビリテーションの内容を、彼自身のマンガと妻の言葉でつづった体験記である。彼が言葉を取り戻すために実際に行った言語訓練リハビリテーションの数々が自身のイラストで示されていてとても興味深い。これらは看護職も心に留めておく患者さんに接するときのヒントになると思う。また「出来なくなったこと」「苦手になったこと」「楽しめなくなったこと」「楽しんでいること」「回復したこと」「今でも続いていること」「今でも少し続いていること」と発症前と発症後のこころとからだの変化をわかりやすく表していることで、高次脳機能障害の複雑な症状が理解できる。最後に参考資料として、医師による高次脳機能障害の解説が載せられているのも親切である。

二冊とも、高次脳機能障害という複雑で目に見えない障害をイラストやマンガでわかりやすく、また湿っぽく深刻になる話を妻の客観的な立場もいれて描かれているので、第三者にも理解しやすいものになっている。看護者は、当事者のこころや思いを知るのに最適であるし、家族の方も高次脳機能障害の複雑性を理解するのにおすすめの本である。